



路上にいる少女とカード遊びをする有田隊員(右)とカサ・アリアンサのスタッフ(中央)。この少女は薬物中毒のためが集中力がなく、簡単な計算もできない

FIELD SKETCH

ストリートチルドレンの社会復帰を目指して

2万人もの少年少女が、路上で生活をしているといわれるメキシコ市。近年、特に少女の数が急増している。社会のゆがみが生み出したストリートチルドレンを施設に保護し、心身のケアや社会復帰を支援する活動が、現地のNGOとJICAの連携で進められている。

文・写真=さかくち とおる (著述家)
text and photos by Sakaguchi Toru



メキシコ
MEXICO

世界最大都市の路上にて

人口およそ2000万人を有する世界最大の都市メキシコ市。ビジネス街には高層ビルが建ち、大通りを多くの車が行き交う。先進国と変わらない都市の姿がある一方で、貧困層などが暮らすスラム街の光景も車窓から見える。中南米諸国では全般的に貧富の格差が大きい。米国と国境を接するメキシコはそれが顕著に見える。中でも、路上での生活を余儀なくされたストリートチルドレンの問題が深刻だ。

1988年からメキシコ市でストリートチルドレンの保護や自立を支援しているNGO「カサ・アリアンサ」のスタッフととも、路上生活をする人たちの現場を回ってみた。カサ・アリアンサに配属されている青年海外協力隊の有田琴美さんも同行してくれた。

向かった現場は中心街に近いビルの前にソファや毛布などを敷き詰めて十数人が寝泊まりをしている一角。ここには垢やほりにまみれた20歳前後の若者が集まっていた。幼児を連れた者もいる。カサ・アリアンサのスタッフは彼らに対して、パネルを使って性と衛生の講義を始めた。

有田さんは、「性に関する知識のないまま、10代前半から性交渉を始める若者も少なくありません。望まない妊娠や性病の感染を防ぐ意味で、こうした性教育活動をしているのです」と語る。JICAは2000年12月から、カサ・アリアンサの性教育活動を支援してきたが、近年、少女のストリートチルドレンが急増しており、その多くがドラッグ(薬物)を使用していたり、依存症の状態にあるという。

言うまでもないが、路上での暮らしは衛生面や安全面など生活環境が非常に悪い。さらに男子に比べて女子は暴力や性搾取などの対象になりやすく、より危険な状況にある。そこでJICAは、カサ・アリアンサが、女子に対する施設受け入れや薬物使



路上生活をする若者。後ろではソファや毛布を敷いて寝ている人がいる



ストリートチルドレンは、路上のごみ集積所からある程度の生活用品を調達できる

やめられないドラッグ が子どもたちの 体をむしばむ

ストリートチルドレンの多くはドラッグの常習者、または経験者である。路上や公園などで何かを握った手を口に当てて、ふらふらと歩いている少年少女がいたら、それは薬物中毒と違っていいだろう。

ドラッグの種類としてはシンナー、洗浄液や塗料、ガソリンなどの液体が多く、ちり紙に含ませて吸い続ける。こうした市販品のほか、マリファナや純度の低いコカインなど、密売人から入手する麻薬も広がっている。

彼らは貧困や虐待などの苦痛から逃避するため、精神的解放を求めてドラッグに手を染める。しかし周りの仲間に勧められるまま、その危険性を知らずに始める子どもも少なくない。過度のドラッグ吸引は脳細胞を破壊し、体をむしばんでいく。

保護施設にやって来た中毒症状の子どもたちに対しては、ドラッグを絶たせるためのカウンセリング、リハビリを行う。こうして薬物中毒を克服できる子がいる一方で、ドラッグやりたさに施設を出て行き、路上と施設の生活を何度も繰り返す子もいるのも現実である。



施設に暮らす少女たちと有田隊員。かつてドラッグ中毒だった彼女たちも、施設の暮らしを通じて成長した

FIELD
SKETCH

有田さんは手工芸の指導のために派遣されているが、少女たちのお姉さん役、あるいはお母さん役のように見える。本来の手工芸指導のほか、スタッフとともに食事の準備をし、子どもたちの遊び相手になり、悩みなど



意欲的な子が多い保護施設ミラモンテでは、みんな真剣なまなざしで課題に取り組んでいた

開けるよつ、見守っていきたい。

その一方、チュリンシオで一定期間を過ごした少女は、次の段階として別の施設ミラモンテに移ることになる。ここで暮らす少女たちは比較的礼儀正しく、勉強や職業訓練に意欲的で集中力もある子が多い。ほとんどの少女は学校に通い、社会に出る準備として働いている子もいる。施設の生活を経て社会に巣立つ少女たちは、数多いストリートチルドレンの一握りだ。それでも、必死に生きようとする子どもたちに少しでも明るい未来が

は施設というよりも家といった感じだ。全員そろっての食事やおやつ、自分たちでの洗濯・掃除、そして各種オリエンテーションなど、彼女たちは起床から就寝まで毎日規則正しい生活を送っている。ここの生活を通して社会性を身に付けて自立することを目標とし、半数以上の少女は学校やカルチャースクールに通っている。

の相談にも乗っている。施設での暮らしは路上に比べると安全で、食事や医療が充実しており、衛生状態もとても良い。しかしそれでも施設から突然いなくなり、路上生活に戻ってしまう少女が後を絶たない。規則の多い生活に慣れなかった

り、同居者やスタッフとの不和、路上仲間からの誘惑などきつかけはさまざまだ。「尊厳ある生き方を選んでほしいのですが、思うようにいかず現実には厳しいですね。路上に戻ってしまうことは残念ですが、彼女たちの可能性を信じるしかないのです」と有田さんは語る。



おやつを用意をする有田隊員。果物に辛いチリソースをかけるのがメキシコ風

社会復帰を目指して集団生活

メキシコ市南部の閑静な住宅街にある、カサ・アリアンサの保護施設チュリンシオ。ここには12〜18歳の十数人、多いときは20人以上の少女が集団生活をしており、印象としては施設というよりも家といった感じだ。

家出をした少年少女たち

ストリートチルドレンと聞くと、日本でも戦後に見られた家族を失った孤児を連想するかもれない。しかしメキシコの路上で暮らす少年少女たちは、そのほとんどに親兄弟や親類がいる。彼らの多くは、貧困家庭で生まれ育っている。家で満足に食事が与えられない子どもたち。失業のため、もしくは働かずに、子どもに労働や物こいを強い親もいる。育児放棄、親類縁者からの虐待など原因はさまざまだが、家庭生活に耐えられず居場所を失った子どもは、家出して屋外での暮らしを

始める。

狭くて汚く、悪臭漂うスラム街での生活に比べると、路上での生活はある意味でまだ快適なのかもしれない。JICAメキシコ事務所の小谷知之さん（おとこ）は、「子どもたちがとって路上は仲間がいて居心地が良く、自由で解放感があり、さらに収入も得られます。通りがかかる大人たちは、「かわいいそつ」という心理が働き、小銭や屋台の食べ物を買ってあげる人も多いのです」と説明する。

こうして容易にモノが得られる子どもたちは、路上での暮らしがやめられなくなる。公式の統計はないが、新聞報道などによると、メキシコ市だけでも2万人のスト



施設で厚紙を使って工作をする少女たち



施設ではスタッフとともに全員で食事をする

リートチルドレンがいるといわれる。貧富格差の大きいゆがんだ社会が生み出した子どもたちに対して、社会復帰のための支援が求められている。カサ・アリアンサは、メキシコ市内に4カ所の保護施設を持ち、社会復帰の意思がある子どもたちを受け入れている。有田さんは、女子が集団生活をするチュリンシオという施設で、手工芸技術の指導に携わっている。